

柳沢公民館 柳沢1-15-1 ☎042-464-8211 kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館 南町5-6-11 ☎042-461-1170 tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館 芝久保町5-4-48 ☎042-461-9825 shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp
谷戸公民館 谷戸町1-17-2 ☎042-421-3855 yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 ☎042-424-3011 hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
保谷駅前公民館 東町3-14-30 ☎042-421-1125 ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

◆保育室から社会へ
「私は、70代の今も営業の仕事をしていきます。公民館活動は、私の社会参加の原点です。」
こう語る大堀名王枝さんは、1978(昭和53)年の婦人問題講座に参加。
その後、受講者で結成した自主サークル
で学習活動を続けつつ、育児中の母親の学習を支えようと公民



大堀さん

館保育室の保育者になりました。「専業主婦だった私は、子どもが小さい間は家庭を守るべき、自分自身は自分で育てるもの、と考えていました。でも、みんなと学ぶうちに地域での子育ての大切さに気づきました。経済的自立をめざすようになり、40代で今の仕事に就きました」
田無公民館あめんぼ青年教室ボランティアスタッフの北澤健子さんも初期の活動を支えた保育者の一人です。
「1979年ごろ、市報で募集を知り、保育者になりました。保育室では子どもたちが仲間とのかかわりの中で成長していきました。保育室に通っていたお子さんが母親になって、今度は自分の子どもを保育室に預けて学ぶ、という学びのつながりがあることが素晴らしいですね」
北澤さんと保育者同期の小見



北澤さん

野朝子さんは保育者になって初めて公民館に足を運びました。「私が保育者になったのは、子育てが一段落した40代。保育者をやめた後もずっと子どもにかかわる仕事をしました。保育者になったことが社会参加の第一歩だったと思います」

田無市立公民館の再建

戦後の教育改革の中で、民主主義と自治の学校である公民館が制度として誕生したのは1946年のことです。翌1947(昭和22)年には、旧保谷市に公民館が開設されました。

旧田無市では、1952(昭和27)年に、現西東京郵便局の場所に既存の施設を改修して開設されました。1959(昭和34)年には、現西東京市民会館の場所に公民館が新設され、移転します。しかし、1968(昭和43)年に市制施行記念として市民福祉会館(現西東京市民会館)の建設が決まると公民館は取り壊され、1969(昭和44)年3月31日、公民館条例も廃止されました。公民館の事業は社会教育課に引き継がれます。

それから6年後、公民館主催の婦人学級などで学んだ市民の建設運動によって公民館は再建されます。人口の急増と急激なベッドタウン化により住環境が未整備の中、まちづくりや公害、教育などの様々な問題に取り組む市民にとって、集い、学び合い、話し合う場、活動の拠点となる公共の施設が必要だったからです。市民は、予算がないことを知ると、当時の美濃郡都知事に対して公民館建設のための補助金交付を求める陳情も行いました。そうした市民の運動の結果、建設予定だった図書館に併設して公民館が建設されることになりました。当時、公民館と図書館の併設施設はめずらしく、一つのモデルケースとして、視察に来る人も多かったといえます。

施設面では、都市型公民館のあり方を示した『新しい公民館像をめざして』(1974年3月東京都教育庁社会教育部発行)を参考にした市民の要望も取り入れられ、一人でも利用できるロビー、印刷室、団体連絡箱、料理・木工等ができる実習室、専用の保育室が設けられました。

◆女性たちが求めた保育室
田無公民館建設前の昭和40年代前半、旧公民館(公民館廃止後は社会教育課)主催の婦人学級では、幅広い世代の女性たちが一緒に学んでいました。若い母親たちは子どもを連れての参加で、学習に身が入らなくなることもあったといえます。その体験から、女性たちは保育室の設置も含めた公民館建設運動を展開、保育室ができました。

野朝子さんは保育者になって初めて公民館に足を運びました。「私が保育者になったのは、子育てが一段落した40代。保育者をやめた後もずっと子どもにかかわる仕事をしました。保育者になったことが社会参加の第一歩だったと思います」

◆実習室から地域へ
奥村栄吉さんは、80歳を過ぎた今も男性の料理サークル「賞味会」で活動しています。まだ現役の会社員だったころ、家族の助言もあって、地域の催しやサークル活動に参加するようになりました。「自分はいなくてもよい存在だと感じることはつらい。第一線を退いた高齢者にとって、自分分は社会に役立つ人間だと感じることが生きがいになる。サークル活動も、親睦だけでなく地域に貢献できることがあれば何かしりたい」と考え、料理サークルの仲間と福祉施設の利用者を食事に招くボランティア活動もしました。ほかのサークルでも活動していて、「いつまでも多くの人とつきあいたい。そのためには、地域で知り合いを増やしていくことが大切。図書館も利用するけれど、人とかかわりがある



奥村さん

◆そして、これからも
西東京市の地に公民館ができてから68年。戦後の復興期や昭和40年代に建設された公民館の建物はもうありませんが、公民館活動の足跡は地域の中に見出すことができます。市民の建設運動によってつくられた田無公民館はそのひとつです。
奥村さんは、「体力的な問題で公民館に来ることもできず、家に閉じこもりがちな高齢者に対して何ができるのか、考える必要がある」と感じています。
私たちは、今も様々な地域課題、生活課題に直面しています。共同・協同・協働の力でそれらに取り組み市民を支援する公民館でありたいと思います。



小見野さん

わが街をもっと知りたくて「木・々子ども食堂」子ども食代無料です
地域の子どものための「コミュニティ作りを進めたい」と願って始めた「木・々子ども食堂」は、保谷郵便局そばの「コミュニティレストラン」で、月に一度、第4日曜日のお昼にオープンしています。子どもの食事は無料なので、賛同する商店や地域の人々からの食材の無料提供とカンパが活動の支えです。
ドキドキ！子どもが来るかな？
プール帰りの子にチラシを手渡すなどして迎えた第1回目の7月26日。心配をよそに、24人の小学生と幼児が親や友達と誘い合って来てくれました。
木・々子ども食堂のこれから
まだ始めたばかりで、チラシを受け取った母親から「なぜ無料なの？」と尋ねられることもありましたが、回を重ねるうちに認知され、来てくれた子どもが

ら食べたものをリクエストしてもらえようになればと考えています。今後は、近所のお兄さんお姉さんに宿題を教えるもったり、遊んだりできる場にもしたいとのこと。「市内にそれぞれに持ち味がある子ども食堂ができればいいな」と語る皆さんの笑顔、ステキでした。
子ども食堂とは？
経済的な理由から食事を十分にとれない子や孤食の子も、安心して食事を取ることができるよう。全国に広がりを見せている市民による取り組み。



子ども食堂を運営する「木・々」スタッフ有志3人

担当者からの講座報告

公開講座 (6月25日 芝久保公民館にて実施)
「作家 石牟礼道子に学ぶ 命への向き合い方」
保育付き講座「私らしい学びの扉をひらいて」の一環で実施しました。石牟礼道子さんについて、長年交流がある講師の実川悠太さんからお話を伺いました。石牟礼さんの代表作『苦海浄土』は、著名な写真家のユージン・スミスをはじめ多くの人々を触発し、水俣病に目を向けさせたことなどを聞きました。
参加者からは「子どもを育てながら、水俣病の患者さんに出会い、作家の道を歩まれた姿に感動しました」「水俣病はまだ続いていて、過去のことにしてはならないと強く感じました」などの感想が寄せられました。